

2023年3月5日（日）主日朝礼拝説教

『私は復活であり、命である』井上隆晶牧師  
イザヤ書 25 章 1～10 節、ヨハネ福音書 11 章 17～27、33～44 節

### ①【神に愛されていても人は死ぬ、死を恐れてはならない】

イエス様の友でマルタ、マリア、ラザロという兄弟姉妹がいました。そのラザロが病気になったので、姉妹たちはイエス様のもとに人をやって「主よ、あなたが愛しておられる者が病気なのです。」(11:3)と言わせました。5節には「イエスは、マルタと姉妹とラザロを愛しておられた」とも書かれています。神が愛していてもラザロは病気になり、死にました。私たちも同じです。神の愛と病気や死を分けて考えなければなりません。でもキリストが愛した人がそのまま死で終わることはありません。ラザロは死にりましたが、イエス様は「私の友ラザロは眠っている。しかし、私は彼を起こしに行く」(11節)と言われます。神の目には、死は滅びではなく眠りに過ぎません。私たちは洗礼によってキリストに結ばれてキリストの体となったのです。キリストは自分の体である私を必ず死の眠りから起こして下さい。キリストの体が死に支配されることはありません。

### ②【イエス様が復活であり、命である】

イエス様一行がベタニアに到着したのは、ラザロが死んで墓に葬られ、既に四日もたった後でした。ユダヤ地方は暑いので、埋葬は死後できるだけ速やかに行われました。当時は、死人の霊魂は死体にもう一度入るために墓の周りを四日間さまようが、四日目には霊は去ると考えられていました。ですから四日というのはもう絶望的な数字だったのです。姉のマルタは出迎え「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」(21節)と言いました。この後、妹のマリアも同じことを言います。「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」(32節)これは彼女たちの口を通して語った教会の信仰告白でしょう。これに似た歌詞が讃美歌 21 の 316 番の中に出てきます。「復活の主がおられるのなら、世も死もわれを主より離せない」

そこでイエス様は言われます。「あなたの兄弟は復活する」。マリアはイエス様が慰めてくれたのだと思い「終わりの日の復活の時に復活することは存じています」(24節)と答えます。このマルタの答えに対してイエス様は「わたしは、復活であり、命である。私を信じる者は死んでも生きる。生きていて私を信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」(25～26節)と言われました。すごい言葉です。こんな言葉をはたして普通の人間が言えるでしょうか。イエス様はこう言われたのです。「マルタよ、あなたは復活を誤解している。死んだら世の終わりに復活すると思っているかもしれないがそうではない。復活は人間が持っている自然の力ではない。人間は自分の力では復活できない。私が復活であり命なのだ。私を信じ、私につな

がっている者はたとえ肉体は死んでも生きており、この世で信じている者は決して死なないのだ。」復活とは魂が天に行くことだと思っている人がいますが、これも違います。イエス様に結ばれていることを復活というのです。いくら来世に行っても、キリストから離れていたら復活しませんし、命もないのです。イエス様こそエデンの園の中央にあった命の木です。この木から取って食べる者が「永遠に生きる」のです。(創世記 3:22) キリストと一体になるのは、この世から始まりますから、復活もこの世から始まり、来世で完成するのです。この世の人は死とは肉体が朽ちることだと思っていますが、聖書が教えている死とは神からの分離です。命とは神自身のことです。私たちの命は限界あるもので「生命」と呼びます。枝が幹から離れたら枯れるように、命の神から離れるから死ぬのです。だから私たちは神から離れることを恐れます。病気も災害も戦争も私を殺すことはできません。肉体は一時的に破壊されますが、私は生きています。礼拝をしなくなり、聖書も読まず、祈らず、神と交わらなければ離れてゆき、やがて神なしに生きることが平気になるのです。それは悪魔の与える麻痺(死)です。

● 2世紀のエイレナイオスは「神との交わりは命であり、光であり、神と共にあるあらゆる善い物を受けることである。しかし自分の意志から神に背く者の上には、神は神からの分離をもたらす。神からの分離は死である。」と言っています。

### ③【イエスは死に涙を流され、憤られる】

イエス様はマリアや多くの人が泣いているのを見て「心に憤りを覚えて、興奮して」言われました。「どこに葬ったのか」(33~34節)人々が「主よ、来てご覧ください」というと、イエス様は「涙を流されました。」イエス様が泣いたという箇所は二か所しかありません。「都が見えた時、イエスはその都のために泣いて言われた。『もしこの日にお前も平和への道をわきまえていたなら…。しかし今は、それがお前には見えない。』」(ルカ 19:42) これは人々の無知を泣いたものです。罪とは、神の恵みに気がつかないということです。この後、「イエスは再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。」(38節)とあります。イエス様は何に憤られたのでしょうか。神は死を創造されませんでした。死がご自分が創造した人間を破壊し、完全に支配し、悲しみを与えているのを見て、主はその敵である死に対して憤っているのです。人間は死に慣れましたが、神は慣れません。決して慣れないのです。幼子は死に慣れていません。大人になるに従って慣れるのです。私たちはあまりにも罪と死に麻痺しています。

● 私は『シンドラーのリスト』という映画を初めて見た時、ユダヤ人が虫けらのようにあっという間に殺されるのを見て、心が高ぶり憤りを覚えました。人間なのに、そう扱われていない姿に憤りを感じたことを今でも覚えています。

● アレキサンダー・シュメーマンはこう書いています。「キリストがいのちです。」

キリストがいのちであることによってこそ、死はキリスト教が宣言する打ち破られるべき敵であり、決して説明されるべき神秘ではないことが明らかにされます。この世の宗教と世俗主義は、死を説明することによって、死に地位と根拠を与え、死を正常なものにしています。キリスト教だけが死を異常なもの、真に恐るべきものと明言します。ラザロの墓の前でキリストは泣きました。主ご自身の死が迫った時、恐れおののき、また悩み始めました。…命であるお方が友の墓で泣いた時、命であるお方が死の恐怖を見つめ抜いた時に（死は神の敵として宣言され）、死に対する勝利がその時に始まりました。」

キリストは人間の死を泣きました。そのことが死は異常なものであることを証しています。死は神の敵です。「最後の敵として死が滅ぼされます」（I コリント 15 : 26）人間の命は、神の命と結ばれ、生き生きと生きるはずでした。神の創造された命を毎日、死が破壊しています。それでも神は毎日毎日、命を生みだします。悪魔はそれを次々と破壊していきます。そして神が造られたこの世界を絶望と暗黒と崩壊で支配しようとしています。それを止めるためにキリストは来られました。キリストは死を憤り、死に闘いを挑まれます。

#### ④【その石を取りのけなさい】

イエス様は墓に来られます。墓は洞穴で石でふさがれていました。イエス様は命じます。「その石を取りのけなさい」（39 節）マルタはいいいます。「主よ、四日もたっていますから、もう臭います。」イエス様はいいいます。「もし、信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか。」神の栄光とは人が復活することです。だから私たちも石を取りのけましょう。この石は私の不信仰の象徴です。石を取りのけなさいとは、あなたが変わりなさいということです。その後神の栄光が現れます。人間の業と神の業の共働によって栄光は現れます。人々が石を取りのけると、イエス様は大声で言われます。「ラザロ、出て来なさい！」イエス様の声が、墓の中に響きます。死の世界、固くなった自分、恐れやこの世の知識でがんじがらめに縛られている私たちに響きます。

●昔の祈禱書にはこう書かれています。

- ・「主よ、息のない者は、あなたの声を聞いて直ちに生きる者となり、死から復活してあなたを讚美しました。」
- ・「地獄は言います。ラザロよ、何をぐずぐずしているのですか。あなたの友であるイエスは外に立って出て来なさいと呼んでいます。すぐに行きなさい。私も楽になります。私はあなたを飲み込んだ時から、吐き出すように促されています。」

ラザロは死んで四日も経ち、陰府に行き、そこで無数の死んだ者たちに会ったことでしょう。彼は死者の仲間になりつつありました。しかし、墓の外で命であるキリストが呼んでいるのです。この声を聞く者は、生き返ることが出来ます。命はキリストの言葉にあります。手遅れということはありません。キリストの言葉

は、あなたを死から命へ、闇から光へと出すことができます。こうしてラザロは蘇りました。ラザロの甦りは、人類の死への勝利の始まりです。死の敗北は始まりました。あなたの死を取り除き、あなたを復活させるために、キリストは死と戦われます。神ご自身が死と戦って下さるとは、何と頼もしい事でしょう。何と嬉しい事でしょう。私たちもその主に感謝を献げ、主と共にゴルゴタの丘へ登ってゆきましょう。